

群 教 セ	G02 - 03
	平 17.225 集

相互理解と主体性を高める 社会科指導の工夫

－ 郷土教材を活用した学習を通して －

長期研修員 小林 禎

（研究の概要）

本研究は、郷土教材を活用した社会科学習を通して、国際化が進む社会で必要となる相互理解や主体性を高めることを目的としたものである。郷土教材の有効性を、相互理解と主体性との関連から、中央中等教育学校・基礎期を中心に検討した。郷土教材を活用した学習が、興味・関心を高め、多角的・多面的に考えることや意欲的に社会のことを考えることなど、相互理解・主体性を高めるために有効かを、授業実践を通して検証した。

キーワード 【社会 中 郷土学習 相互理解 主体性 地理歴史 中高一貫教育】

主題設定の理由

国際化が進む現在の日本では、世界との交流なしには、生活が成り立たない。異なる歴史や文化をもつ人と、日常的に交流する機会が多くなる。群馬県も状況には変わりがない。国際化が進む社会では、世界的規模の視野から物事を考え、世界のために貢献しようとする態度が求められる。それを支える資質として、相互理解と主体性を高めることが必要になると考える。

県立中央中等教育学校では、国際化社会を意識した教育を指向し、「地球市民としての日本人」を目指している。「地球規模で物事を考えられる視点や態度、実践力」を、身に付けなければならないとし、“Think globally, act locally.”（地球規模で考え、足下から行動する）をモットーに、日常の学習活動を実践している¹。広い視野をもち、自分の周囲の環境へ、できることからかわるには、主体性が重要だと考える。また、継続的なイマージョンプログラムにより、国際語である英語を使用した、実践的な国際コミュニケーション能力を育てている。豊かなコミュニケーションには、自分や相手の文化、歴史などを相互に理解する必要があると考える。相互理解や主体性を高めるため、社会科等の各教科・科目の役割は大きいですが、それらを高めるための、各教科・科目間の関連や単元構成などは、あまり意識されていないように考える。限られた時数の中で、必修教科・科目等を習得でき、相互理解や主体性を身に付けられるカリキュラムを、中高一貫教育のよさを生かしな

がら作成したいと考えた。

郷土は、生徒にとって親しんできた生活の場であり、興味・関心をもちやすい。郷土の事象は自分の生活に直接影響を与え、当事者意識をもちやすい。その郷土は日本や世界とのかかわり無しには、存在しえない。郷土を起点に世界をとらえることで、世界のことにも実感をもって理解しやすく、かかわり方も主体的になると考える。

国際社会に主体的に生きることは、学習指導要領改訂の視点や社会科等の目標と重なる。国際社会に生きる公民的資質を身に付けることは社会科等の最終的なねらいである。

以上のことから、郷土教材を活用した学習を通して相互理解や主体性が高められると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

郷土教材を活用した社会科学習が、相互理解や主体性を高めるために有効かを、授業実践を通して検証する。さらに、基礎期社会科を中心に社会科等のカリキュラムを見直し、相互理解や主体性を高める学習と郷土教材の系統を探る。

研究の見通し

1 郷土教材により、様々な観点から社会的事象をとらえ、意見を出し合うことで、多角的・多面的な視点から考えるようになるなど、相互理解を高めることができるであろう。

2 郷土教材により、興味・関心が高まり、意志決定をする学習活動を行うことで、主体的に社会のことを考えようとするなど、主体性を高めることができるであろう。

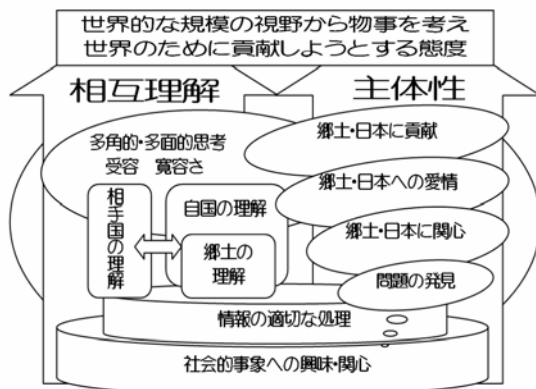
研究の内容と方法

1 基本的な考え方

(1) 相互理解と主体性について

国際化が進む社会で求められるのは、世界的規模の視野から物事を考え、世界のために貢献しようとする態度と考える。それを支える資質として、相互理解と主体性を高めることが必要であると考える² (図1)。

図1 相互理解と主体性



ア 相互理解

相互理解とは、自分と相手の共通性や差異を理解し、認め合うことである。誤解や紛争を避けるには、情報を適切に処理し、相手のことを理解する必要がある。自分や自分の周囲の社会を理解した上で、相手や相手の社会のことも理解する。そして、自分と相手を比較して、何が同じで、何が違うか、よく考える。そのためには、相手を認めようとする態度と寛容さも同時に必要となる。

イ 主体性

主体性とは、自分自身の意志や判断に基づいて行動しようとする態度である。人は、地域、国家、世界など様々な社会の一員として、よりよい社会を作り上げるため、主体的に社会にかかわっていかなければならない。そのためには、周囲の社会や世界に関心をもち、情報を収集し、何が正しいか、何をすべきか適切に判断した上で、積極的に働きかけようとする態度が必要となる。

(2) 郷土教材について

郷土教材とは、郷土にあるものや事象、場所を、学習に対する興味・関心を高めるため、社会的事象を理解するためなどに用いる教材である。

本研究では、学習対象の「身近な地域」を「郷土」とした。郷土とは、自分が生まれ育った、または生活する土地で、精神的つながりを感じている土地のこととされる。そのため、地域と比べ、郷土の概念には心情的側面が強い。社会科等の学習に、客観的・事実に認識に加えて、郷土を含む社会の発展に貢献しようとする態度の育成を中心とした、心情的・態度的側面を取り入れることで、社会科等の究極的目標（国家・社会の形成者として必要な公民的資質の育成）に到達できる³。

なお、郷土の範囲は、学習対象や居住地、学校所在地によって変わる。生徒は、生活範囲が広がり、学校中心の生活ではあるが、居住市町村を越えた活動が増えている。特に、中央中等教育学校では、県内各地に生徒の居住地が分散していて、生活範囲が広い。そこで、本研究では、学校所在地を中心とした群馬県を郷土として考える。

(3) 社会科等について

社会科や地理歴史科、公民科などの社会科等の教科・科目は、「広い視野に立って」国際社会に生きる「主体的」な国家・社会の一員としての自覚や資質、公民的資質を養うことを目的としている。高校の地理歴史科や公民科は、中学校社会科の学習の成果の上に立って、他教科とも関連させて学習する。また、中学校の社会科は、小学校社会科や各分野・領域の関連をはかりながら学習する⁴。そこで、小学校から高校までの社会科等を見通し、系統を考える必要があると考える。

本研究では、小・中学校社会科、高等学校の地理歴史科、公民科を一緒に論じる際は「社会科等」、小・中学校社会科について論じる際は「社会科」と表記する。また、社会一般は「社会」、社会科等の学習で扱う事象を「社会的事象」と表記する。

2 研究の内容

(1) 社会科等における相互理解と主体性

社会科等で身に付ける必要のある、相互理解と主体性にかかわる能力や態度を以下のように考えた(表1)。これらは、必ずしも段階的に身に付けるものではなく、何度も繰り返して学習し、高めていくものだと考える。6年間を見通して、計画的に指導していく必要がある。

表1 社会科等で身に付ける相互理解と主体性

相互理解	情報を適切に読み取る(表) 日本や外国の歴史、 文化を正しく理解する(知) 広い視野をもち、 社会的事象を多角的・多面的にとらえる(考) 社会的事象を比較し、関連づけて考える(考) 共通性や差異を受容し、認め合う(態)
主体性	社会に関心をもつ(関) 社会的事象の中から問題を見つける(関) 問題解決のための方策を考える(考) 自分のできることから、 社会に働きかけようとする(関) 国土に対する愛情をもつ(関)

注：(関)～関心・意欲・態度、(考)～思考・判断、(表)～技能・表現、(知)～知識・理解

(2) 郷土教材を活用した学習の意義と種類

ア 学習の意義

郷土を教材とした学習には、相互理解や主体性を高めるため、以下のような意義があると考えられる。

(ア) 相互理解に関して

郷土の理解が、多角的・多面的な視点の一つとして、日本や世界のことを考え、理解する際の軸となり、郷土との比較や関連づけにより、考えや理解がより深くなる。(関連：表1～)

郷土について語れるようになる。郷土について語ることで、他の地域や国の人と交流する際、自分のことを理解してもらいやすくなる。(関連：表1)

中央中等教育学校に県内各地から集まる生徒は、各地で、自分なりの社会に対する視点と世界観を培ってきている。学校所在地を中心とした群馬県という一つの郷土を設定し、それに対する世界観をすり合わせることで、多様な視点が存在することが分かり、多様で多角的・多面的な視点から社会的事象をとらえるよさを実感できると考える。

(イ) 主体性に関して

身近で親しみがあり、学習に対する興味・関心をもたせやすい。学習の導入に位置づけることで、より広い社会、日本や世界に対しても興味・関心をもたせることができる。郷土から、自分と社会のつながりを感じることで、社会にかかわろうという態度が育つ。(関連：表1)

身近なものや場所を教材として学習するので、生活経験を生かしやすい。抽象的にとらえがちな社会的事象を、生活経験を生かすことで、

具体的に、当事者意識をもって考えさせることができる。身近な事象から当事者意識をもち、それを広げていける。(関連：表1～)

郷土の発展へかかわり、貢献しようとする意欲や態度を基礎として、そこで得た自信や方法をもとに、かかわる対象、貢献する対象を日本や世界に広げることができる。(関連：表1)

郷土に対する愛情が、国土、世界に対する愛情を育てることにつながる。(関連：表1)

イ 学習の種類

郷土を教材とした学習には、以下のようなものが考えられる(表2)。

表2 郷土教材を活用した学習の種類

<p>郷土で学習・フィールドワーク 郷土の場所で、体験的に学習し、社会的事象の見方や考え方などの方法を身に付ける。 郷土を学んで社会を理解 郷土のものや場所について学習し、学習のねらいを達成する。典型的な事例を学習する。 郷土から見て社会を理解 郷土のものや場所を視点として、社会的事象をとらえる。その視点に基づき、比較し、関連づけて考え、理解を深める。 課題を考え社会に貢献 社会的事象に関心をもち、当事者意識をもって、自分にできることから社会に働きかけようとする。</p>
--

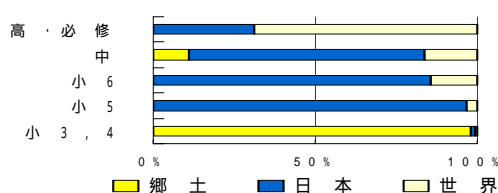
(3) 郷土教材を活用した学習のカリキュラム

ア 学習指導要領に見る系統

社会科等では、ほぼ同心円拡大的に、郷土、日本、世界と学習対象地域が広がる。その中で、郷土を直接対象とした学習(郷土学習)は、導入的、基礎的な位置づけで行われる(図2、詳細：資料1)。そこで生まれた興味・関心、身に付けた見方や考え方などの方法を、日本や世界の学習で生かしたり、郷土の事象と比較し、関連づけて考えたりする。

郷土学習以外にも、小学校・中学校段階では、児童生徒の興味・関心や主体性を高めるため、あるいは多角的な視点から考えさせるための配慮が必要とされている。そのためには、「学習の意義」で述べたように、郷土を教材とした学習を指導計画に位置づけることが有効であると考えられる。

図2 学習対象地域の比率



注：各地域を対象として何時間学習するか、社会科等の時数に占める割合を表す。小・中学校は東京書籍、高校は岐阜県総合教育センターの指導計画作成資料を参考にして作成した。

注：「高・必修」は中央中等教育学校での必修科目である「世界史B」と「現代社会」を表す。

イ 郷土教材を活用した学習に適した時期

小学校中学年頃の一方的で自分本位な思考は、高学年、中学校へと進むにしたがって、多面的なものになる。社会的条件を取り入れた考察が十分になる。そして、中学3年頃から高校になると、総合的な思考や、他律的条件や競合関係、地域形成者としての条件、グローバル的条件など、抽象的、間接的、複雑な条件を取り入れた高度な思考が可能になる⁵。

相互理解や主体性に関する能力や態度は、中学校、高校の6年間（中央中等教育学校では、6年間を基礎期、充実期、発展期に分けている）をかけて、高めていくものだと考える（例：資料2）。その基礎として、郷土を教材とした学習を、主に基礎期に行うことが有効であると考え。理由は以下のとおりである。

思考が多面的なものに移行する時期なので、多角的・多面的な視点の一つとして、郷土からの視点で思考する力を育てることが必要である。

郷土に対するイメージは、学年が上がると否定的になるという調査結果もある⁶。その前に、郷土に対する肯定的感情を育てることが必要である。

中央中等教育学校には県内各地から生徒が集まる。社会的事象について、県内各地からの視点でとらえ直し、比較することで、理解を深くさせることができる。郷土を対象にした学習でも、多角的・多面的視点でとらえるよさを実感させやすく、一方的な視点からの移行をさせやすい。

ウ 基礎期の社会科と郷土教材を活用した学習
基礎期では、地理的分野と歴史的分野を並行して学習する、（パイ）型の社会科指導計画が立

てられている。その中で、地理の身近な地域を調べる学習と、都道府県の一つとして群馬県を調べる学習、歴史の身近な地域の歴史を調べる学習が郷土学習にあたる。郷土学習では、郷土を対象に調べ、考える活動を行い、社会的事象に対する興味・関心を高めるとともに、見方や考え方などの方法を身に付けることを目的としている。

郷土学習を含め、郷土教材を活用した学習をカリキュラムに位置づける場合、次の点に配慮する必要があると考える。

郷土学習で生まれた興味・関心や身に付けた方法は、事後の学習で生かされることが大事だと考える。単元や教科全体の導入に位置づけ、具体的で興味・関心をもてる教材を活用する。

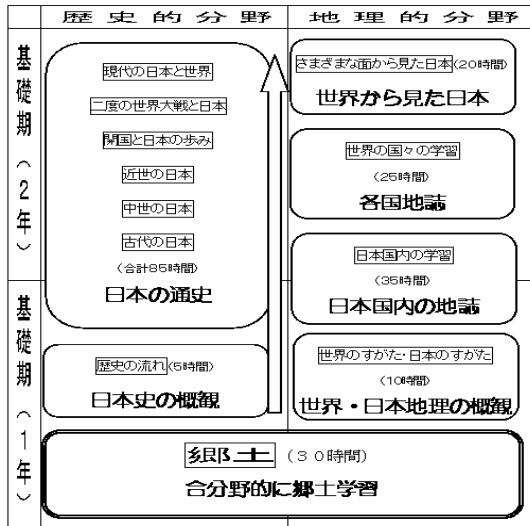
身に付けた方法を、事後の学習で生かす機会が少ない。歴史的分野では、その時代を象徴する、典型的な郷土教材を活用し、1時間程度学習した後、そこで身に付けた方法を生かすことができる。しかし、地理的分野では、授業において「二つ、又は三つ」の都道府県と国を事例として取り上げる機会しかなく、身に付けた方法を十分に生かせない。日本や世界の人の相互理解のためには、授業中にもっと多くの都道府県や国々の学習を地誌的に行い、理解することが大事だと考える。

「郷土を学んで社会を理解」できる教材は少ない。郷土教材の多くは、「郷土から見て社会を理解」するものである（詳細：資料3）。郷土から見て社会を理解する教材は、興味・関心・意欲を高めるため、多角的・多面的な視点の一つとするために有効だと考える。

「身近な地域」を調べるフィールドワークには時間がかかる。社会科の時数は限られているので、あまりゆとりがない。効率的に行うことが大事だと考える。

以上のことから、基礎期の最初に、合分野的に郷土学習を行う必要があると考える。この学習で、社会科学習全体への興味・関心を高め、社会的事象の調べ方や見方、考え方などの方法を身に付けさせる。そして、世界と日本の地理的特色を概観させ、歴史の大きな流れを学習させた後、世界と日本の各地誌、日本の歴史（通史）の学習をさせる（図3、詳細：資料4）。この学習を、郷土学習の後に位置づけることで、郷土学習で身に付けた興味・関心や方法を、効果的に生かすことができると考える。

図3 郷土学習を位置づけた基礎期カリキュラム



充実期以降の社会科等とは、以下のような関連があると考えられる。

郷土教材を活用した歴史的な学習で身に付けた方法や知識が、多角的・多面的な視点の一つとなる。そのことで、世界史や日本史の学習を、実感をもって理解しやすくなる。

充実期以降の生徒は、より高度で、抽象的な思考ができるようになる。地理では、基礎期までの具体的な学習から、より高度で抽象的な系統的学習、主題的学習活動が可能になる。

地誌的な学習により、世界の状況についての理解が具体的になる。そのことで、公民的分野や現代社会の学習も実感をもって、具体的に理解しやすくなる。

充実期以降でも、「郷土から見て社会を理解」する教材により、学習に対する興味・関心や社会に対してかかわろう、貢献しようという意欲が高まる。

3 研究の方法

(1) 授業実践計画及び検証計画

見通しに基づいて、以下の計画で授業実践を行い、相互理解や主体性が高まったかを検証する(計画の詳細：資料5)。

ア 見通し1：

相互理解を高める授業実践・検証計画

対象	群馬県立中央中等教育学校 1年
期間	平成 17 年 10 月 6 日～10 月 19 日
単元名	都道府県を調べよう～群馬県～ [学習指導要領 地理的分野(2)イ]

時程	【小単元名】(形態) 主な学習内容
1 つかむ	【群馬はどんなところ?】(個人・一斉) 事前に考えた自分の居住地から見た群馬県について発表し合う。地図帳から群馬県の特徴を読み取る。居住市町村の様子を自分なりにまとめておいた名刺の交換(例：図4)をし、自分の郷土を紹介し合う。これらの活動を通して、群馬県多様性に気付く。
2	【群馬の自然】(一斉・グループ) 群馬県の自然(地形や気候)の概要と多様性について、景観写真の読み取りや、白地図を使った作業をする。上毛カルタの、自然を詠んだ札から、群馬県のシンボルには何がふさわしいか考える。これらの活動を通して、自然の概要を理解する。
3 追求する	【群馬の農業】(一斉・グループ) 嬭恋村の事例から、農業と環境条件との強い関連に気付く。統計を調べ、「群馬県の農業の主役」は何かを考える。これらの活動を通して、資料を的確に読み取り、群馬県の農業の概要を理解する。
4	【群馬の工業と交通】(個人) 群馬県の工業と交通の概要を、グラフや主題図から読み取る。公共交通機関の利用を増やすにはどうしたらよいか、身近なコミュニティバス「ぐるりん」を例に考える活動を通して、社会への関心を高める。
5 まとめる	【群馬はこんなところ!】(個人) 群馬県の施策を参考に、20年後の群馬県について考える。学習を通して作り上げられた群馬県のイメージとよさが伝わるようにポスターとしてまとめる。
6	
検証の観点	群馬県に対する一人一人の見方を出し合い、認め合う学習により、多角的な視点から群馬県をとらえることができたか。 様々な観点から群馬県について考える際、自分なりの意見を持ち、それを交換することで、群馬県のことを多面的にとらえることができたか。 以上の学習を通して、群馬県を多角的・多面的な視点からとらえて考え、相互理解を高めることができたか(図5)。
方法	事前・事後の生徒の群馬県に対する見方を比較する。 ・ワークシート ・作品(ポスター) ・自己評価カード(資料6 (2))

図4 名刺

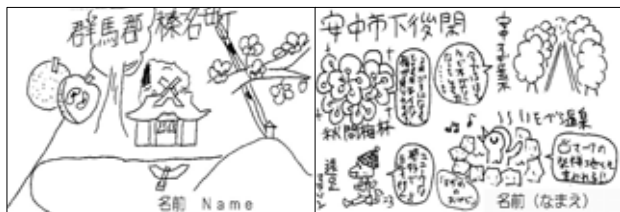
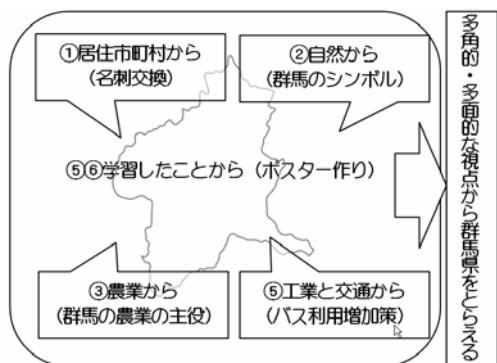


図5 実践授業の構想図(1年 単元全体)



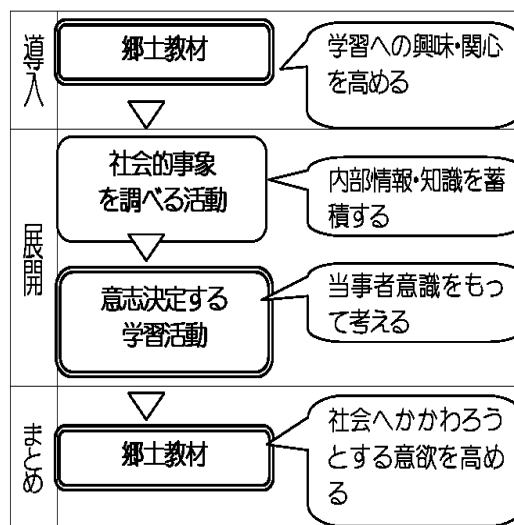
イ 見通し2 :

主体性を高める授業実践・検証計画

対象	群馬県立中央中等教育学校 2年
期間	平成 17 年 10 月 24 日 ~ 11 月 4 日
単元名	世界と日本の産業・資源 [学習指導要領 地理的分野(3)ア(ウ)]
時	過程
	[小単元名](形態) 主な学習内容
1	つかむ 【群馬発！世界を支える技術】(一斉) 工業立国、技術立国である日本の特徴があらわれ、企業の努力や工夫が分かる、群馬県ゆかりの企業や技術者、製品を取り上げ、日本の産業に対する興味・関心を高める。
2	追究する 【世界の資源と日本】(一斉) 県内の発電所と上毛カルタの札から学習に対する興味・関心をもつ。エネルギーの自給率や世界の鉱産資源に関する資料を調べ、どのようなエネルギー政策が適切か考える。これらの活動を通して、日本はエネルギー資源に恵まれていないことを理解する。
3	追究する 【工業立国・日本の特色】(一斉) 県内の企業スポーツチームから学習に対する興味・関心をもち、群馬県の工業の特色に気付く。統計資料を調べ、群馬県との比較や工業地域間の比較をし、日本の工業の概要と特色について理解する。日本の工業の課題に関して、企業の立場からどのような対策がよいか考え、理解を深める。

4	【日本の水産業】(一斉) 群馬県の水産業から、自然条件との関連に気付き、学習に対する興味・関心をもつ。統計などの資料を調べたり、説明を聞いたりして、水産業をめぐる問題を、自然条件だけでなく社会条件との関連からも考える。
5	【日本の食糧自給率を考える】(一斉・グループ) 郷土料理や和食の材料の自給率を調べ、海外に食料の多くを依存していることに気付き、学習に対する興味・関心をもつ。統計資料を調べる活動を通して、食料自給率の状況を具体的に理解する。様々な条件を考慮して、食糧自給率を上げていくべきかどうか、自分なりに考える。
6	【地元商店街復興計画】(一斉・グループ) 群馬県内の大規模小売店や県内外の商店街の様子から、商業の状況に気付き、学習に対する興味・関心をもつ。前橋市の環境条件を生かし、商店街を賑わわせるにはどうしたらよいか考える活動を通して、社会への関心を高める。
検証の観点	導入時に郷土教材を取り上げ、展開の最後に日本の産業に対して、「どうしたらよいか」「自分ならどうするか」などの意志決定をする学習活動を行うことで、生徒が興味・関心をもって学習に取り組み、社会のことを主体的に考え、主体性を高めることができたか(図6)。
方法	学習ごとの生徒の様子を検討する。 ・ワークシート

図6 実践授業の構想図(2年 一単位時間)



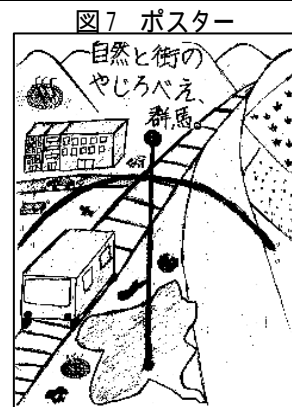
研究の結果と考察

1 授業実践の結果

授業実践の結果、以下のような生徒の変容や様子が見られた（表3、4）。

表3 見通し1:相互理解を高める授業実践の結果

【小単元名】	生徒の変容
<p>【群馬はどんなところ？】</p> <p>生徒の居住市町村から見た、群馬県のイメージを発表する。</p> <p>口頭で説明しながら、居住市町村のことを描いた名刺の交換をする。</p>	<p>地図を調べる、名刺交換をするなどの学習活動により、一面的だった群馬県のイメージが、多角的なものになっていった。群馬県には、地域ごとに様々な特産物や有名なものがあること、自然もあれば都市もあるなどの多様性に気付いた。</p> <p>【生徒C】県内各地に自慢できるような野菜などの食べ物、歴史的建造物などがあることを知り、「どの地域にも、違ったおもしろい名産があり、すごい」と思った。</p> <p>【生徒A】名刺交換により、つまらないと思っていた群馬県にも「色々有名なものがある」ことが分かった。</p>
<p>【群馬の自然】</p> <p>上毛カルタによまれた自然の中から、群馬県のシンボルには、何がふさわしいか考える。</p>	<p>群馬県のシンボルを考える際、自分なりに考えた後、グループ内で話し合い、シンボルを一つ選んだ。意見交換し、妥当性を検討する活動を通して、視点が多角的・多面的になった。</p> <p>【生徒B】群馬のシンボルとして温泉を選んだ。始めは単に数が多いことを理由に挙げていた。グループで話し合う中で、「有名な草津、伊香保、四万、水上の4つの温泉には、他県からわざわざ足を運んでくる人がたくさんいる。主要な観光産業」と考えが広がった。</p> <p>【生徒C】地元の妙義山を選んでいった。グループで話し合う中で、視点を群馬県全体に広げて考えるようになった。「日本有数。地元にあってなじみ深い。人間の体の7割は水。農業や工業を支える」ことを理由に、グループで利根川を選んだ。</p>
<p>【群馬の農業】</p> <p>「群馬県の農業の主役」は何か考える。</p>	<p>嬭恋村の高原キャベツを事例に、農業と環境条件の関連性について理解した後、様々な資料を調べることで、多角的・多面的に農業について考えることができた。農業の主役を考える際、一つの資料にこだわった意見もあったが、複数の資料から多面的に考えた生徒もいた。</p> <p>【生徒A】野菜を「主役」とした。根拠を様々な資料、統計に求め、「生産量が多く、上位。嬭恋のキャベツ、下仁田のネギなどは有名で、コンニャクイモ生産率1位。利根川が流れていて、野菜作りに適した土地」であると理由を挙げた。</p>
<p>【群馬の工業と交通】</p> <p>群馬県の交通の様子を、人口や工業、地形などと関連させて考える。</p> <p>コミュニティバスの利用増加策を考える。</p>	<p>工業や交通の概要を理解する際、他のことと関連づけて考えるよう指導したことで、考え方が多面的になった。単に地名だけを挙げていた生徒が、「(交通が発達している場所は)人口が多く、工業が盛んなところ」と、環境条件と関連づけ、総合的に考えるようになった。コミュニティバスの利用増加策を考える活動を通して、社会への関心は高まったが、自分本位の、一面的な意見が多かった。高齢者など、他の交通弱者の利用の便や、運営する地方自治体の考えや費用にも目を向けさせることで、より多角的・多面的な思考ができたと考える。</p>
<p>【群馬はこんなところ！】</p> <p>20年後、群馬県がどうなっていて欲しいか、考える。</p> <p>群馬県のよさを伝えるポスターを制作する。</p>	<p>ポスターを、周囲の構想・制作の様子を見ながら、自分で構想・制作し、改めて群馬県のよさや多様性を理解できた。生徒は、ポスターの題材に、自然を多く取り上げていた。自然だけを表現したものもあったが、自然を生かした産業(温泉などの観光業、農業)や、工業や交通(機械工業や伝統工業、自動車)を同時に取り上げて表現したものや、自然と都市のバランス・調和を表現したものが多かった(例:図7)。</p> <p>【生徒B】単元が始まる前、群馬県を「交通の便が悪い」と、否定的にとらえていたが、「自然 交通 美味しい食 三拍子そろった群馬県!!」と肯定的にとらえ直し、ポスターを制作した。</p>



注： は「一人一人の見方を出し合い、認め合う」学習活動を、 は「自分なりの意見を持ち、交換する」学習活動を表す。

表4 見通し2:主体性を高める授業実践の結果

【小単元名】	生徒の様子など
<p>【群馬発！ 世界を支える技術】 群馬県にゆかりのある世界的な企業や技術</p>	<p>郷土の生産活動に目を向け、身近なところに日本や世界に進出する企業があることに気付いた。群馬県の企業が、予想以上に有名であること、身近なものを製造していることが、生徒には驚きだった。群馬県のことを見直した、という意見が多かった。 【生徒D】「ホッチキスの針を福祉施設で箱詰めしているなんて驚いた。社会貢献のために色々するのはですね。企業も大変そうです。国内シェアが75%はすごいと思いました。群馬県すごい！」と、肯定的に驚きを表していた。</p>
<p>【世界の資源と日本】 上毛カルタの札 県内の発電所 県内の新エネルギー事情 日本のエネルギー政策はどうすべきか</p>	<p>発電所のサージタンクは、あまり見覚えがないようだった。しかし、その発電所が上毛カルタの札に描かれていたことや、県内に発電所が多くあることから、エネルギーに対する興味・関心が高まった。「電源群馬」も今は多くのエネルギーを他県や海外に依存していること、日本も多くの資源を海外に依存している事実には驚き、真剣にエネルギー政策を考えた。意見のもとになる資料が多く、生徒は考えやすかった。 【生徒E】授業後の感想で「今日の授業で扱った問題は、一人が何をしようとしてもどうにもできないことだけど、一人一人が何かしないとできないことだ」と、社会への関心を表した。</p>
<p>【工業立国・日本の特色】 県内の企業スポーツチーム 県内の登録外国人の比率 円高の状況下、自動車製造会社の経営者ならどのような対策がよいか</p>	<p>企業チームは知名度が高く、興味・関心が高まった。画像の提示のたびに、生徒は企業名や市町名を声に出していた。対策を考える際、「利益だけ考える」という自分本位で一面的な意見も少なくなかった。しかし、「経営者なら」という仮定により、会社として信頼を大切に、雇用のことを考える等、広い視野から考えた意見もあった。外国人労働者の増加を、生活経験と照らして考え、日常生活でのつきあい方に不安を感じている生徒もいた。 【生徒D】授業後の感想で「日本は円高でこれからどうしたらいいのだろうか？と、とても悩んでいる。技術で安さに勝つ！日本にはそれができる。そのために勉強をして技術力アップが大切だと思った」と自分なりに問題をとらえ、どうしたらよいか考えようとしていた。</p>
<p>【日本の水産業】 群馬県の漁業と環境条件 マグロが食べられなくなったら、どうするか</p>	<p>群馬県の漁業と環境条件以上に、寿司ネタなど食べる機会が多い魚について漁業と環境条件を考えたことで、自分の生活と関連させて考えることができた。生活と関連させたので、自分の意見を持ちやすかった。マグロについて、食べられるうちに食べるという自分本位な考え、養殖技術の向上に期待したいという他人任せのような意見が多かった。 【生徒E】「マグロは食べられて当たり前。お寿司でも全てのネタをずっと食べられると思っていた。これだけ輸入があり、乱獲で危機に陥っていたことは知らなかった。獲ってばかりの人間だから、今度は海へ何か与えないといけないと思う」と、自分に何ができるのか考えようとしていた。</p>
<p>【日本の食糧自給率を考える】 郷土料理と和食の自給率 日本の食糧自給率は、そのままでもよいか、上げた方がよいか</p>	<p>郷土料理や和食の画像を提示したことにより、興味・関心が高まった。さらに、和食の材料の自給率を調べる中で、その低さに生徒は一樣に驚き、以後の調べ、考える活動に興味・関心を高くもって取り組んでいた。当事者意識をもって、自分の生活と照らして考えた意見が多かった。日本がどうなるといいか、自分はどうしたいか等の意見が多かった。 【生徒E】外国からの輸入が途絶え、自分の好きなものが食べられなくなったら困ると考えた。そして、「自己のわがままは自分に返ってくるのだと思った。和食は苦手だが、少しでも食べて日本のものを大切にしたい」と、自分なりにどうしたらいいか考えた。</p>
<p>【地元商店街復興計画】 身近な小売店 前橋市内の商店街 商店街に賑わいを取り戻すには、どうしたらよいか</p>	<p>買い物等で利用することが多い店や近くの店の画像を提示するたびに、生徒は、大きな声で店名を言ったり、経験を話したりしていた。行ったことのある店と比較して、具体的に考えさせたので、意欲的だった。生活経験と照らして考えた生徒が多かった。 【生徒D】「高崎の商店街も、さびれている。何か暗い感じで行きたいと思えない。近くの商店街では激安八百屋があり、そこには時々行く。やはり安さがポイントなのか？」と生活経験と照らして考えた。</p>

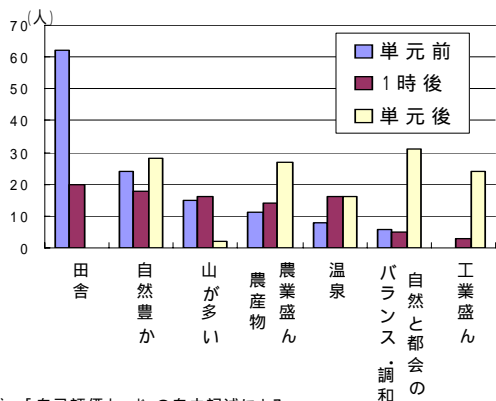
注： は興味・関心・意欲を高める郷土教材を、 は意志決定をする学習活動を表す。

2 授業実践の考察

(1) 見通し1:相互理解に関して

群馬県を多角的・多面的な視点からとらえて考え、相互理解を高めることができたか

図8 群馬県に対するイメージの変化



注:「自己評価カード」の自由記述による。

群馬県のイメージを拾い出し、集計した。

単元の前には、群馬県に対するイメージとして「田舎」というマイナスの意見や「山」「自然・緑が多い」という意見が多かった。一面的で、偏見を伴ったものもあった。しかし、単元が終了した時点では、「自然豊か」という意見は多いままだが、「農業が盛ん・農産物が有名」「温泉」「工業が盛ん」「自然と都市のバランス・調和がとれたところ」という意見が増えた。マイナスイメージの意見はほとんどなく、プラスイメージが増えてきた。一面的な意見は減り、多角的・多面的に群馬県をとらえるようになってきた(図8)。

第1時の名刺交換等の学習活動を通して、田舎のイメージはかなり減り、地域によって差異があるという意見が増えた。その後、授業で自然や自然を生かした産業(農業、温泉)、工業など、様々な面から群馬県を取り上げて学習した。これらの学習を通して、自然や産業面から群馬県を肯定的にとらえ、地域による多様性を、格差ではなく、特色・多様性・バランスとして考えるようになったと考える(詳細:資料6(1))。

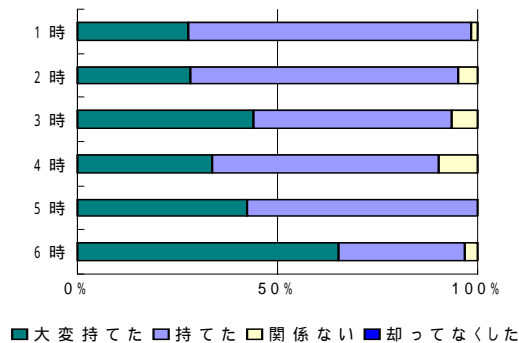
(2) 見通し2:主体性に関して

興味・関心をもって学習に取り組み、社会のことを主体的に考えるなど、主体性を高めることができたか

単元終了後にとったアンケートによると、郷土教材を活用して授業したことで、学習に対する興味・関心が高まったことが分かる(図9)。その中でも特に、企業スポーツチーム、郷土料理と和食、

地元の大規模小売店と商店街をなど、生活経験が多いものを教材とすることで、興味・関心が高まると考える。

図9 郷土教材の使用で、学習に対する興味・関心をもてたか

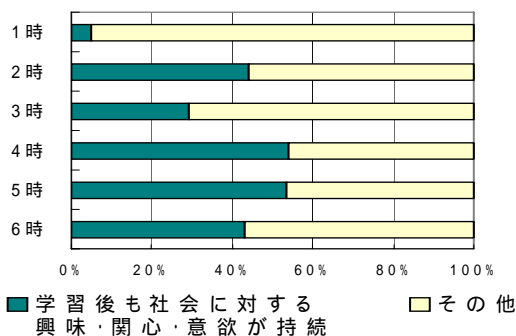


注:アンケートによる。どの時でも、「却ってなくした」という回答はなかった。

郷土教材によって興味・関心が高まり、学習に主体的に取り組むことができた。さらに、意志決定をする学習活動を行うことで、社会に対して当事者意識をもってかかわろうという意欲が高まったと考える。その際、資料が豊富で、生徒の知識や生活経験があるなど、具体的に考えやすくなることで、生徒はより主体的に考えることができると考える(詳細:資料6)。

主体的に考えることができた授業後の感想には、社会への要望、社会の動向に対する関心、自分なりの社会へのかかわり方を表す記述が多い。学習後も社会に対する興味・関心・意欲が持続していたと考える(図10)。

図10 学習後も社会に対する興味・関心・意欲が持続したか



注:学習後の感想による。社会への要望、社会の今後の動向に対する関心、社会に対する自分のかかわり方を記述した生徒の割合を表す。

注:第1時は、意志決定する学習活動は行っていない。

3 研究の考察

(1) 相互理解に関して

中央中等教育学校において、生徒の居住市町村から見た群馬県のイメージを出し合い、居住市町村のことを紹介し合う学習活動により、多角的な視点で群馬県のことをとらえることができた。また、様々な面から群馬県について学習する際、自分の意見を持ち、それを交換することで、より多角的・多面的に群馬県のことをとらえ、考えることができた。

群馬県のことを理解できたことで、他地域を群馬県と比較して考えることができるようになる。また、群馬県を一つの視点に、日本や世界のことも多角的・多面的にとらえるようになる。そのことで、さらに相互理解が高まっていくと考える。

(2) 主体性に関して

郷土教材を活用して、社会的事象に対する興味・関心を高め、意志決定をする学習活動を行うことで、社会のことを主体的に考えることができた。資料を豊富に用意する、生徒のもつ知識や生活経験を生かせる発問をするなど、具体的に考えやすい工夫をすることで、より主体的に考えることができた。主体的に考えたことにより、学習後も、社会に対する興味・関心・意欲が持続した。

郷土教材の活用により、郷土に対する肯定的な感情を持ち、郷土に対する興味・関心が高まった。日本や世界に対してもかかわっていこうという態度の基礎が育成できたと考える。

(3) 基礎期社会科カリキュラムに関して

郷土学習を基礎期に位置づける必要があると考える。それ以後の学習では、郷土学習で身に付けた興味・関心や見方、考え方などの方法を生かす必要があるが、そのような活動が地理的分野では少ない。郷土学習で身に付けた方法などは、日本の各地方や世界各国の地誌的な学習単元を設け、そこで生かせるようにした方がよいと考える。

今後の課題

課題としては、以下のことが考えられる。

検証の困難さ

相互理解や主体性などは、数値化をすることが難しく、その高まりの検証は主観的なものになりやすい。客観的な検証方法を考え、取り入れていく必要がある。

郷土教材の事前準備の必要性

郷土教材は教科書や資料集等の掲載が少ない。教材の開発には、数々の資料にあたり、教師が現場に行き調査するなど時間がかかる。そこで、単元ごとに具体的な授業構想を立て、使える画像資料や文書資料などの郷土教材を、入手先や出典先を明記した上でリストアップし、準備しておく必要がある。

カリキュラムのさらなる検討

郷土教材を活用した学習の中には、フィールドワークのように時間がかかるものがある。社会科等には、重複した内容や、分野や科目、教科を超えて統合的に学習した方が効果的な内容があり、それらを統合して学習することで、時数も有効に使えると考える。そこで、6年間を見通し、中高一貫教育のよさを生かしたカリキュラムを、さらに検討していく必要がある。

地理的分野以外での実践・検証

今回は、地理的分野の実践・検証にとどまった。歴史的分野や公民的分野等でも郷土教材は有効であると考えられるので、今後それらの分野でも実践・検証をしていきたい。

提案の妥当性の追求

本論の中で、郷土学習を位置づけた基礎期カリキュラムを提案した。実践・検証を含め、提案の妥当性をさらに追求していきたい。

(担当指導主事 榎本 功)

1 『CURRICULUM GUIDE』(群馬県立中央中等教育学校)

2 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)(平成10年7月29日 教育課程審議会)」(文部省/1998)の中で、今後の教育で「国際社会の中で日本人としての自覚をもち主体的に生きる資質や能力の育成や、我が国や郷土の歴史や文化、広い視野をもって異文化を理解することの重要性が述べられている。

3 『現代群馬の郷土教材探求 - 社会科学習・総合的学習の基礎として - 』(山口幸男編/2001 あさを社)、『社会科地理教育論』山口幸男著/2002 古今書院)

4 小・中・高等学校の学習指導要領と、その解説による。

5 前掲『社会科地理教育論』による。山口は地理的思考の発達傾向について述べている。

6 佐藤浩樹の論文、高柳浩道の論文による。前掲『現代群馬の郷土教材探求 - 社会科学習・総合的学習の基礎として - 』所収。佐藤は前橋市と松井田町の小中学生、高柳は伊勢崎市の小学生を対象に研究した。